三角表象の話

The Triangular Symbolism

*
井 本 英 一
IMOTO Eiichi

イランのシーア派イスラム教徒は、モハッラム月10日（アシュラ）に、イマーム・ホセインの喪の祭礼の最後の行列をおこなう。H. マセ『ペルシア人の信仰と習俗』（パリ、1938、126頁以下）に、この日の行列のあらましが記述されている。まず、軍隊が行列を告げるラッパを鳴らす。道の両がわには飾り馬の列がつづき、その一頭ずつを、飾りのない馬に乗った男が曳いていく。底辺の角を互いに結び合わせた三角旗の連続を道の両がわに渡し、両端を2人の少年がもつ。この黒い旗には、イマーム・ホセインと他のケルベラの殉教者の名が刺繍してある。ファンファーレが鋭く鳴る。頭に小型の泉の模型をのせた男がつづき、彼のそばには、数人のベドゥインの服装をした少年が、ひさごを手にして、のどの渇いた人に水に与える。長くて重い棒に、色とりどりのカシミヤの円い布が垂れ下がり、それらが重なり合って、ドレスのひだ飾りのようにになっている。棒の頂上には、松かさか、金属の手がついている。男たちがこの棒を掲げて行く。……

行列の記述は、このあとも延々とつづくが、ここで問題にしたいのは、道の両がわに渡した三角旗の連続である。道の両がわを行く、乗り手のない飾り馬は、この場合は、目に見えない、ケルベラの殉教者たちの乗馬であろう。行列には、ひさごや手形が見られるが、これらのものは、再生のシンボルであることは以前に論じたことがある。布が垂れ下がった棒は、てっぺんに青い枝葉がついた生木の柱に、五色の帯状の布を巻いた英国の五月柱を想起させる。5月1日のメーデーと、その6か月あとの11月1日の万聖節は、日本の正月と盆に相当する日で、布が垂れ下がった木は、小正月のとんどである左義長の祭りのとき、正月の飾り物などを結びつけた生木に相当する。モハッラム月10日も、かつては小正月であった。このような象徴使用には、前イスラム的な再生を祈願する目的があった。ひさごに入れた水は、再生のための生命の水である。

道の両がわに渡された黒い三角旗は、底辺が一線になり、各個の頂点が下にくるので、連続三角文を形成することになる。この帯は、いわゆる道切りとしての機能をもつと考えられる。行列は、それぞれの地域を出発して、バザールに向かう。テヘランのバザー

* 大阪外国語大学教授
Professor, Osaka University of Foreign Studies

ルは、かつての境界と見なされた所で、そこには都門や税関が今も残っている。日本の道切りは、村境に注連を張り、片草鞋をぶら下げ、悪霊が村に侵入するのを防ぎ、いっぽうでは、疫病を村から追い出す役目をはたす。道切りには、草鞋や巨大な人形をとまなうものがある。イランのアシュラの行列では、草鞋にあたるのは手形であり、巨人にあたるのは、五色の布が垂れ下がる棒である。行列は移動するので、道切りも移動する。各地区のアシュラ行列は、最終的にはバザールの緑の広場に集合したので、それぞれの道切り、布の垂れ下がった棒、手形などが一所に集合することになり、境界性が強調された。イスラムの立場上、飾り馬は唯一神の乗り物ではなく、布を掛けた棒もあの世からの訪れ人である巨人の偶像ではなく、手形も神の手ではなくなった。連続三角旗は道切りであった（道切りの記述は、『関敬吾著作集』9、同朋舎、1981年所収の「共同祈願」1 道切に見られる）。

写真家の岩宮武二氏が、ラダックを取材したとき、カルギルからムルベックへ向かう道を横切って、祈りの旗という道切りが渡してあり、白・赤・青・緑の四角い小旗（布）が、洗濯物を干してあるように、綱にすき間なく吊るしてあった。支柱の下にはマニ塔があり、附近には、大小のチョルテン（仏塔）やマニ塔、さらにはマニ石が見られた（読売新聞1984年9月29日夕刊）。ここでは、固定した道切りが見られ、附近には聖なるものが点在する。しかし、旗は三角ではなく四角である。柱と旗（布）がこのような道切りではなく、柱の頂上から多数垂れ下がる形式になった場合が考えられる。この形式の柱は、神あるいは祖先の偶像と考えられたものである。日本の道切りに、片方の草鞋を吊るしたり、巨人の人形が出現するもの、同じ構造にもついている。村の入口に立つ、例えば、韓国の天下大將軍と地下女將軍の木の巨人像は、村の守護神であり、道切りでもある。スリランカにあるアダムス・ピークの聖所の周囲に、あたかも洗濯物を干しているかのように、色とりどりの布が綱に掛けてあるのも、道切りである。

明治11年、黎明期の日本を訪れたI. パードは、秋田県の湯沢から横手にいたり、雪をいただいた鳥海山を眺めながら六郷に着いた。たまたま、その地の素封家の葬式に参列することができ、死体の処理の方法などをくわしく記述している（イザベラ・パード著、高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社、1973年、171-173頁）。その中に、現在では都会の葬式では見られなくなった風習が見られる。それによると、葬家の玄関の外には、小旗や飾りの棒が立っていた。青い服装の上に翼に似たうす青い羽織をはおった2人の男が来る人を接待し、もう2人の男が水を入れた椀と白絹の手拭いを差し出したという。ここでは、道切りの旗と、偶像を象徴する飾り棒が家の前に立っていた。これらの旗や飾り棒は、出棺と共に葬列の先頭に行くものであった。イランのアシュラの行列では、それぞれの地区を代表する旗を先頭に、連続三角旗や布を垂らした長大な棒が進む。

バードはさらににつづける。彼女は葬家に入れてもらい、死者が横たわる部屋に入った。未亡人はきわめて美しい女性で、亡くなった夫の傍に座り、父と母の下座にいた。未亡人は顔を白く化粧し、口紅を塗り、髪をていねいに結び、べっこのかんざしで飾っていた。彼女は空色の絹の美しい着物を着て、白クレープの羽織をまとい、真紅のクレープの帯は金の刺繍がしてあった。彼女は未亡人というよりも、結婚式当日の花嫁のように見えた。部屋も、葬式というよりは、お祝いのときのように見えた（173頁）。マセの記述によると、アシュラの行列は、そのあと、腕を失った者、頭を斧で割られた者、目に矢のささった者など、さまざまな殉教者がつづき、さらにイマーム・ホセイン教主の遺体がつづく。そのあとに、ホセインの子供たちがつづく。1人の男が、カーセムの新婚の寝室をあらわす小さな独房を頭に載せている。そこには、新婦の衣裳をまとい、宝石で飾ったホセインの子供が入っていて、顔と手足をヘンナで染めている（前掲書、127頁）。イマーム・ホセインの葬列を模したこの追悼行列で、新婚の寝室がつづくのは、イスラム以前の死と再生の儀礼の名残である。バードが見た花嫁姿の未亡人が、葬列に加わるのと同じ構造である。さきの大戦のはじめころ、名誉の戦死をした人たちの追悼式が東京で行われたとき、東京や大阪などから参加した未亡人は、黒の喪服を着けていた。東北地方から来た未亡人たちは、派手な花嫁衣裳を着けて出席したので、主催者はその理由を聞くまで、とまどったという逸話がある。

四国八十八ヶ所巡礼の先達の旗持ちは、いわば、冥界巡りの先達ともいうべきもので、その旗の霊力により、昔は宿泊所に投留するたびに、病人を治療する職能をもっていた。この場合は、大師の霊力が旗に宿るとされたのである。喪家の門前に立てる旗は、死者そのものを表すか、その家の祖先を表すのであろう。アフガニスタンは春分の日が新年である。首都カーブルの郊外のサヒーの聖廟や、北方にあるマザーレ・シャリーフでは、シーア派の人々が、教主アリーの旗を立てる。旗は、高さ10メートルほどの棒を立て、頂上には飾り花を付け、その下から色とりどりの布が垂れ下がる。人々は柱をよじ登り、布に手を触れようとする。これらの聖地には、新年には、全国からシーア派教徒が、冥界の恩恵に触れるために集まってくる。旗は、聖者アリーを表すものであった。白川静『中国古代の文化』（講談社学術文庫、1979年）によると、族の字は旗と矢から成り、祖先の霊がその旗に宿り、守護霊として戦闘を導くとされた。そのとき、旗の前に、矢を供える儀礼が行われた。人びとは軍旗を奉じて行動する。それが、旅団の旅である。氏族の旗は単なる標識ではなく、氏族神が氏族の保護霊としてそこに宿るのである（86-87頁）。

旗は、布が用いられるようになる以前は、葉や木や草の繊維であったり、動物の皮であった時代がつづいた。イラン神話は、旗の起源が槍先につけた皮であると伝えている。

フェルドウシーの『王書』はいう。カーヴェという鍛冶屋には18人の息子がいたが、暴君ザッハーク王の両肩の蛇の餌として、次々と殺され、1人しか生き残っていなかった。カーヴェは王に反抗して立ち上がり、人々に正義を訴え、鍛冶屋が仕事をするとき、膝に掛ける皮を槍の先につけて進んだ。彼は、暴君ザッハークの許から、正義の人であるファリードゥーンの許に走った。ファリードゥーン王は、槍先につけられた皮の前掛けを見ると、それに赤・黄・すみれ色のリボンを垂らし、それをカーヴェの旗と名づけた。それ以後、イラン王が即位するとき、この旗に宝石をつけ加え、絹や錦で飾り立てたので、カーヴェの旗は、闇夜でも輝いて見えた（黒柳恒男『ペルシアの神話』泰流社、1980年、51-54頁；岡田恵美子『ペルシアの神話』筑摩書房、1982年、56-60頁）。

カーヴェの旗は、皮の旗と飾り棒が合体したものであった。イランの伝説では、即位式にはカーヴェの旗は不可欠なものであった。旗に用いられた皮は、トーテム動物の皮で、王の保護霊でもあった。日本では、大嘗祭の祓いには、虎像の藁の幡1旒、鷹像の隊の幡4旒、小幡20旒、鉦鼓各1面を用いよ、とか虎像の藁の幡1旒、鷹像の幡4旒、小幡40旒、鉦鼓各1面を用いよということが『延喜式』左右兵衛の巻や左右衛門の巻にある（田中初夫『踐祚大嘗祭』木耳社、1975年、研究篇182-183頁）。これは唐制であるが、小旗とトーテムの動物の旗が一組となっていることに意義がある。

槍の先に布を結び付け、旗印とする風習は世界に広く見られるところであるが、アラブの部族の間でも同じことが見られた。各部族は自己の軍旗をもち、槍先にその旗の布を付けて、もっとも勇敢な者に捧持させた。予言者マホメットの軍旗の印は鷲であったといわれている（フィリップ・K・ヒッティ著、岩永博訳『アラブの歴史』上、講談社学術文庫、339頁）。古くは、槍先に鷲の羽がつけられてあったと考えられる。槍以前は、竿にトーテムの皮あるいは全体像を付けたと考えられる。古代エジプトの諸部族が連合して、ひとつの行政地域を形成したとき、いくつかのノモス（州）という単位に発達した。ノモスの中には諸々の神がいたが、各ノモスには主神がいた。これらの主神は動物の姿をしていて、竿の頂上の台座に安置された。各ノモスの成員は、行列に参加するとき、先頭に行く、ノモスを代表する神像を載せた竿のあとにつづき、神の霊によって保護された。この神像は、それぞれのノモスのトーテムであった。この旗竿の動物は、やがてその動物の皮で代表されるようになった。エチオピア・スーダン・ケニアの国境あたりに住むボディ族の首長が、新しく就任するとき、首長となる人になう色彩と模様 に似た牛を殺したその皮で盾のような旗がつくられる。東アフリカのサバンナには、さまざまな色彩と模様の牛がいて、どんな子供も、自分のになう色彩と模様の首飾りを身につけている。彼らは、自分の色彩と模様にちなんだ歌をうたってもらうと、興奮して踊り出す（福井勝義「サバンナの色彩言語」『is』総特集 色、ポーラ文化研究所、

1982年、143、242頁)。ボディ族の各人には、それぞれの牛と対応する色彩と模様がある。逆にいえば、牛は現前するトーテムで、それと同じ色彩と模様の間人は、その牛に保護されるのである。このような姿の方が、古代エジプト時代の、統合された部族の主神を旗印にした部族連合よりも古い。ボディ族は各人が守護霊をもち、古代エジプト人は、ノモスの人々が守護霊をもった。モンゴルでは、羊を屠殺したあと、定まった方法で皮を剥ぎ、胸骨部の皮を長三角形に残し、のちにこれのみを剥ぎとり、自家の屋上または外壁につるし、屠殺した羊の数を誇示する（吉田順一「モンゴルの肉食」『月刊百科』平凡社、1983年10月号）。著者の注によれば、これは、大正5年の参謀本部の『東部内蒙古調査報告・経営資料』によったものという。三角の動物の毛を、家の壁に吊るすのは、小旗を玄関に掲げるのと同じ意味をもっていたのであろう。皮の数が多くなると、連続三角文となる。羊が部族を守護する神と信じられた時代、その皮でつくった旗で、道切りをし部族の各成員を保護したのである。入口に皮を掛ける風習は、のちに刑罰の形式に転用された。ダリウス大王は、敵将の皮を剥いで、城門に吊るし、見せしめとした。しかし、この場合にも、まだ、外部からの邪悪な影響を防ぐ目的があったようである。マニ教の創唱者マニは、ササン朝皇帝に捕えられ、グンディ・シャープールの都門あるいは病院の門に彼の生皮が吊るされた（フェルドウシー『王書』C1455；マニ教史料は須永梅尾『マニ教の世界』私家版、1991年、95-99頁）。『王書』の伝承では、マニの生皮は、病院の前に吊るされたともいう。病院の戸口にこれを吊るすのは、ある種の呪術である。それは病人の治療のためのものであり、外からの魔の侵入を防御するためのものである。トーテム獣の皮に代わって、処刑者の皮が道切りに用いられるようになったと思われる。いずれにしても、都門や病院の門は、生と死の世界の境界であった。

允恭天皇が崩じた後に、木梨の軽の太子が帝位に即くことに定まっていたが、まだ帝位に即かないうちに、同母妹の軽の女郎女と不倫の関係を結んだため、役人や天下の人々は、軽の太子に背いて、穴穂の御子（安康天皇）に心を寄せた。かくて太子は捕らえられ、伊予に流されることになるが、女郎女があとを追ってきたところ、太子は2首の歌を詠んで2人で自決する。第1の歌は、^{こもりく}隠国の^{はつせ}泊瀬の山の、大きい高みには幡を立て、小さい高みには幡を立て、汝が定めた、心にかける妻がいとおしい。……で、第2の歌は、隠国の泊瀬の川の上流の瀬には聖なる柱を立て、下流の瀬には（俗世界の）美しい柱を立て、聖なる柱には鏡を掛け、美しい柱には玉を掛け、玉のようなわが思う女、鏡のようなわが思う妻がいるというのなら、わたしはその家にも行こう、その国をも偲ぼう、というものである。幡とは縦長の^{のぼり}幟で、この場合には葬送に用いられる幟であろう。それが2人の悲劇的な最期をすでに暗示しているようである（久野昭「隠国の旅」『日

本研究』1 国際日本文化センター紀要、1989年、37頁)。2本の聖俗を代表する柱と旗は、葬式で用いられた飾り柱と旗にあたるものであった。木梨の軽の太子が最期に詠んだとされるこの2首の歌は、古代歌謡の中で、葬送に詠われたものを、2人に仮託したと考えられる。

幡は旗であり、トーテムあるいは祖先霊、あるいは自己の他我を表す守護霊の表象であったと考えられる。幡の頭部は三角形で、その下に長方形の幡身が垂れ、下部に数本の脚が付く。幡身には、龍・虎・鳳凰などの吉祥鳥獣などの刺繍が施してある。その意味は、はやくから忘れ去られたであろうが、幡身が、これらトーテムの皮であった伝承である。ここでは、頭部の三角旗が問題である。この三角旗は、イランのシーア派のアシュラ行列で見られる、道切りの用をなす連続三角旗に関係があるからである。

わが国では、葬儀のとき、死者や特定の人々が、額の所に、紙または布の三角形を付ける風習がある。民俗学では、忌みの状態のとき、白布で頭を覆ったが、それが簡略化して、ミカクシ・カミカクシと呼ばれる布切れや三角紙を頭部や頸部に付けることとして残ったとする(柳田國男監修『民俗学辞典』1951年、東京堂、「喪服」)。この項目は柳田自身の筆になるものではない。柳田の筆になる「幽霊思想の変遷」(1917年)『定本柳田國男集』第15巻所収)には、当時の東京の周辺の村であった内郷村の葬儀のことが述べられている。門の外に、芝土を盛って、墓標のような1本の柱を立てる。柱の上には小さな制札が打ち付けてあった。夕方になると、その標木の下芝土に、長さ7～8寸の竹の串に白紙を挿し込んだのが、いくらか挿してあった。死者の近親者は、葬列に参加するとき、この白紙を挟んだ竹串を襟などに挿して行き、帰路には一定の場所に挿して去る(563-564頁)。串に挟む紙は、半紙の八つ切りで、これを両隅に合わせて三角に折った形は、一部の学者が、紙鳥帽子と称している、死人の額に貼るものに少し似ている。この三角紙は、江戸などでは、幽霊の標象のように思われ、死人だけがこれをつけることになっていたが、地方によっては、親族故旧の関係にあるものが、これをつけるという話を記憶する、と柳田は述べている(564頁)。さらに、柳田は「忌と物忌の話」(1933年)『定本 柳田國男集』第27巻所収)では、三角の紙冠を近親のみが被り、後には死者のみにこれをつけさせて、幽霊の1つの看板のようにになっているが、本来はいずれも、これをつけた者が「忌み」であることの表示に過ぎなかった、といっている(318頁)。これらの記述によると、三角紙(布)は、もとは死者はつかなかったものらしい。一部の学者が鳥帽子に似ていると称している、という柳田の言は、この説に対してどちらかといえば否定的である。

江戸時代の辞書である谷川土清『和訓栞』上巻(名著刊行会、1973年)の「えぼし」の項に、現在は死者に三角の紙をあてるが、元禄のころまでは、葬を送る者はみな、こ

の三角の紙をあて、死者には、三角の内に万字を書いて区別した、とある（326-327頁）。また、江戸時代末期の民俗誌である喜多村信節撰『嬉遊笑覧』（名著刊行会、1970年）の「紙えぼし」の項によると、清少納言は『枕草子』の中で、見くるしきものの条に、法師・陰陽師のかみかぶり（紙冠）して被えをするのをあげている。この紙冠は鳥帽子のように黒く染めた三角紙を用いた。「ひたひ紙」の項によると、『十戒図』で葬送のさい、男の額にあてるのは白の三角紙である。今でも田舎では、葬礼に白い三角紙を額にあててゐるが、これは紙冠の遺風である、といっている。さらに、幽霊は歌舞伎では、先細の竹の先に紙をあて、よろめきながら出てくるので幽霊とはこのようなものだと皆に認識されたが、民間でこのような風習は、元禄の中ごろにはうせてしまった、ともいっている（巻6下、兒戯、166-167頁）。

三角紙（布）が鳥帽子の簡略化したものかどうかは疑わしい。古墳時代後期からそれらしいものが見られるからである。江上波夫『騎馬民族国家』（中公新書、1967年、その他に平凡社版や中公新書改版などがある）に、後藤守一が指摘した、豪族着用の天冠とその豪族の随従する埴輪人物像がつける三角巾式（式）の天冠には大きなへだたりがあるという説をあげている（295-297頁；「日本統一国家と大陸騎馬民族」）。これによると、死者は三角巾式の冠を着用していない。埴輪がつける三角巾式（式）のものは、簡略化した冠のように見える。韓国における現代の死体の処理の仕方は、頭から縛っていき、全部で5か所結び、最後に腹部を結ぶ。結ぶ間に、白紙でつくった三角帽を挿入する。死者があゝ世の大門を通過するとき、中門神にさしあげるものだといわれる（李社鉉他著・崔吉城訳『韓国民俗学概説』学生社、1977年、72頁）。ここでは、死者は三角帽を被らないが、身につけていく。江上、前掲書によると、後藤による高句麗壁画の観察では、埴輪冠に見られる三角巾式（式）のものは折風に近いという（297頁）。死者と近親者のいずれが三角巾をつけるかについては、これらの例から見るとゆれがある。

中国では、冬至から105日目（日）が寒食節で、寒食節の3日目は清明節である。新しい墓には、この日にお参りして掃除するのが習わしである。禁中や皇族がたやご親族も、この日に御陵や祖先のお墓に使いをやってお祀りされる。その供人は、みな紫の上衣に白絹の三角子、青い脚絆といういでたちである（孟元老著・入矢義高、梅原郁訳注『東京夢華録』岩波書店、1983年、233、235頁）。訳注では、三角子は未詳としているが、三角形の紙あるいは布のことであろう。これを額にあてて御陵に参拝したと考えられる。青い脚絆をつけたとあるが、日本の葬儀では、青い服装をした人がとりしきったことと、色彩に関して共通点をもつ。青色は、エジプトのアラブの間でも、葬式の色であった。ウィリアム・レイン著・大場正史訳『エジプト風俗誌』（桃源社、1977年）によれば、経帷子にとっていちばん無難な色は、白と緑である。しかし、青またはこれに近い色を

除けば、どんな色でも用いられる（265-266頁）。ここでは、青色が忌まれているが、異教時代の葬の色であったと思われる。ちなみに、第89図の葬列では、棺架の前を3人の男の子がいき、その前には2本の旗を掲げた2人の男がいくのが見られる。第91図の墓石の上には、シャーヒドという、男女と思われる、形が同一でない2本の石柱が立っている。1本の石柱の頂上には、丸い球体のものがついている。飾り棒と称しても差し支えなさそうである。この葬儀でも、旗と飾り棒が見られるのである。

三角帽子には、ある種の禁忌がつきまとう。中国の文化大革命の最中、紅衛兵たちが、国家の要人に黄色い三角帽を被せ、胸に罪状を書いた板を吊るさせて曳きまわしていた。19世紀のイランでは、ユダヤ人は黄色い三角帽を被らされ、馬ではなくロバに乗ってカーシャーンの街路を通行することを余儀なくされた。三角帽子は、あとで結論が出ると思うが、もとは、豊穰・再生を象徴するもので、それを死者に適用することによって、死者がよみがえることを願ったものであった。しかし、やがて、死者に関係することだけが強調され、穢れたものとされ、上のような使用例が生じたのであった。中国の少数民族である彝族の成年の女性は、花飾りのある三角帽を被り、結婚すると、黒ターバン風の帽子に変わる（鈴木正崇、金丸良子「雲南省彝族民俗調査ノート」『東アジアの古代文化』41号、1984年、185頁）。三角帽と花飾りは、ガンダーラ美術のエロス像に見られる。バーミヤーン石窟の、35メートルの大仏龕の天井に、4頭立ての天馬にひかせ、馬車に乗る、イラン風な太陽神の壁画がある。その左右の上部に天衣^{てんい}を両手にもち、三角帽を被ったエロスがいる。エロスが花環をかつぐ姿は、ガンダーラ美術では珍しくないし、西域のミールーンの壁画にも見られる（林良一『シルクロード』美術出版社、1962年、121-123頁）。三角表象は、三角帽を含んで、被りものの単なる簡略化したものでなく、死・再生・婚礼などに現れる象徴らしいことが分かる。

ニュー・ブリテン島のラバウル周辺に住むトーライ族の秘密結社には、2種類の仮面神があり、三角に尖って、目玉を大きく描いた仮面が「ドック・ドック」（亡魂の意味）の母「トゥブアン」で、頭上に高い棒を立てた仮面が「ドック・ドック」である。ドック・ドックとその母トゥブアンは、昭和3年、岡正雄『異人その他』の中で日本にも紹介されたが（岡正雄『異人その他』言叢社、1979年、136-137頁）、高林公毅「南太平洋にドック・ドックは生きていた」（『えとのす』21号、特集、金関丈夫博士「その人と学問の世界」）は、従来のパーキンソンの説明とはちがって、これまでドック・ドックとされた仮面が、実はトゥブアンであり、トゥブアンとされていた仮面がドック・ドックであることを確認した（127頁および口絵写真）。これらの来訪神は、八重山の赤マタ・黒マタや、秋田のナマハゲと同じように、2体が一組となって来訪する。それは母子であったり、男女であったり、生死であったりしたのであろう。ニューブリテン島

の2つの仮面は、一方が三角で、他方が棒で、前者は鳥の羽根で飾られ、後者は花や果実のようなもので飾られている。この1対の象徴は、葬儀や婚儀にさいして現れる旗あるいは三角表象と飾り棒の1対と対応すると思われる。トーライ族の三角帽は、祖霊（死者の先祖）が被る不死の象徴である。

日本に渡来した、舞楽でも使われる蔵面は、布地または厚紙に薄絹を張り、人面を象徴的に図案化した、チベット仏教の黒帽と同じ要素をもつ。額の所には、黒い山型の三角形があり、その下に鼻が付き、左右に巴文様の目が付いている。両耳はローマ字のS字で描かれる。口も三角形で、その下に箒のようなひげが描かれている。実際には、目の位置は、左右の巴の上であり、それぞれ、横長に切り抜いてある（『自然と文化』特集かぶる、1985年、10-11頁に杉浦康平の記述と解釈がある）。杉浦によると、この面だけが、舞楽面の中で唯一の布面である。恐らくつくっては捨て、つくっては捨てるという、焼去し「穢れ」や「祟り」を祓い、また新たにつくりかえて、再生させる仮面の本性との関係が重要である（前掲書、11頁）。この蔵面の額の三角形の屋根形の2つの斜線に平行して、2本の太い線が引かれており、あたかも、三角形が3つ重ねられたかのような印象を与える。口を表す三角形もあるので、この面には、4つの三角形が描かれているといえる。口の三角形と額の三角と、口の下へのひげと耳の位置にある大文字のS字は、後述する隼人の盾の上下の連続三角文と上部に付いた馬の毛と、上下の連続三角文の中間部の逆S字文を想起させる。この蔵面を被る者は、あの世からこの世を訪ねてくる来訪神で、いつも死と生の境界に出現した。三角表象はこれを示している。

三角表象は、これまでの例だと、しばしば飾り棒に類するものと一組になっていた。上の蔵面では、いくつかの三角形は見られるが、棒に類するものを見ない。恐らく、舞台のほかの場所に立っていると考えるのがよいであろう。あるいは、面の口にあたる三角形と、箒のような、口の下に生えたひげが、三角と飾り棒を表しているのかも知れない。三角表象と棒は『アラビアン・ナイト』の中の「バスラのハサン」にも現れる。ハサンは、女王に捕らえられて幽閉された、自分の妻と2人の子供を助けるため、川べりに沿って歩いていると、魔術師の2人の子供に出会った。2人の前には、1本の銅の杖と、三角形の皮を張り合わせた頭巾が1つ置いてあった。2人の子供は、これを取り合っていた。ハサンは子供たちから、杖と頭巾を手に入れ、頭巾を被ると姿が見えなくなった。ハサンは妻子を助け出し、杖で地上を打って魔王軍を呼び出して、女王軍を破った（大場正史訳『バートン版・千夜一夜物語』河出書房、1967年、第821夜—第828夜；池田修訳『アラビアン・ナイト』平凡社、1989年、第821夜では、3枚の皮をつなぎ合わせた頭巾になっている。いずれも、被りものという点では共通している）。ここでは、帽子と杖は、魔法のかくれ簍と魔法の杖になっているが、この2つのものが、あの世と

の境界にあり、それを所有するこの世の者が、あの世的な力を得る。それは、ちょうど、この世の死者が、この二つによって、あの世で復活するのと軌を一にする。皮の被りものは、トーテムの名残であると考えられる。

結婚式で花嫁は、カツギといって短衣を頭から被ってゆき、葬送には同じカツギを用いるが左袖を被る。別の地域では、結婚式ではタテに被り、葬式ではヨコに被る。頭や顔を覆うのは、赤ん坊の宮参りの形として広く見られるし、形も意味も変わってしまったが、花嫁の角かくしでも見られる。葬式の場合は、通過儀礼に参加する人であって、死者自身ではない。死者にも三角巾をつけさせる所は多いが、これも被りものと考えてよいかも知れない（波平恵美子『ケガレの構造』青土社、1984年、93頁）。結婚式や葬式で本人が用いる場合は、本人があの人となっていて、人々の目から隠れるのである。葬式の参列者が三角巾をつける場合は、道切りとなるのであろう。波平も考えているように、死者の三角巾を被りものの変形と考えるには、ある種のためらいがある。

正倉院蔵の羊木ひつじきろうけち蒔絵屏風に描かれた羊の胴、脚、首に、三角形、連続三角形、菱形、鋸歯文などの文様が見られる。伊藤義教『ペルシア文化渡来考』（岩波書店、1980年）は、羊の体に描かれた鋸文は、羊座から運行を始める太陽の出入りする180の窓を意味するとして、『ブンダヒシュン』を引用して説明する（106頁以下）。正倉院の羊木屏風の羊と瓜二つのものが、エジプトのアンティノエで発見された羊文錦で、連珠文の首飾りをつけ、リボンをはひらめかして歩くムフロンの姿を織り出している。正倉院の同じ羊にはリボンがないが、連珠文の首飾りをかすかに認めることができる（林良一『シルクロードと正倉院』平凡社、1966年、78-80頁）。東西のムフロンの羊と同じ羊文が、サマルカンドの壁画に見られる。サマルカンドの北方にあるアフラシヤブ都城址の壁画には、文様の入った織物の絵が多数見られるが、その中に、連珠文の首飾りを掛け、その首飾りの留金から、リボンをはためかせ、体には多くの三角文をつけたムフロンの羊（訳文では山羊になっている）の行列がある（L. I. アリバウム著、加藤九祚訳『古代サマルカンドの壁画』文化出版局、1980年、136頁および口絵54、54a）。上述のアンティノエ出土の錦に描かれた羊は、ギメ博物館に蔵せられるもので、6-7世紀（ササン朝期）に属するものである。正倉院のムフロンの羊にはあごひげはないが、アンティノエにはあごひげがある。アフラシヤブの羊は、正倉院のよりは、アンティノエのものに酷似している。しかし、アンティノエのものには三角文がない。

羊はこの世とあの世の中間に位置した動物なので（井本英一「羊の話 東と西」『習俗の始原をたずねて』法政大学出版局、1992年）、境界性の記号である三角文や鋸歯文が見られるのである。アンティノエの羊には、同心円と、向かい合った三日月文が描かれている（林良一『シルクロード』179-181頁）。三角文と円文は、同類の象徴と考えら

れていたらしい。いずれも、墓室内に見られるからである。シースターンのハームーン湖の中央の孤島、クーヘ・ハージェのバルティア時代の遺跡では、漆喰装飾に、格子文、鋸歯文、円形重複文も見られる。神殿の壁画は、1世紀に比定されるもので、アカンサスの葉飾り、音楽家、神、国王夫妻などで構成されている（ロマン・ギルシュマン著、岡崎敬他訳『イランの古代文化』平凡社、1970年、275-276頁）。クーヘ・ハージェのバルティア神殿は、1世紀のころも巡礼地としての神殿であった可能性がある。格子文様や網目文様は、現在もイスラム聖者廟で見られる、聖者の棺を取り囲む格子に見られる。魂の散佚を押さえ込む、たましずめの役割りを果たす象徴である。鋸歯文と同心円文がこれとともに見られるのである。

鋸歯文は、馬と太陽を組み合わせた象徴とともに、テベ・シアルクのB墓地から出土した壺の文様に用いられている。この時期のB墓から発見される頭蓋骨の多くは、従来イラン高原では見られなかった短頭である。このことから想起されるのは、同じころ、インド・ヨーロッパ系に属する短頭の民族が、イタリアのみならず、西ヨーロッパにも侵入していることである（ギルシュマン、前掲書、72頁）。しかし、鋸歯文は、インド・ヨーロッパ系民族にだけ特定される文様ではなく、汎民族的に見られる文様である。

イラン南東部からパキスタン南西部にかけての地域であるバルーチスターンの、マクラーン山脈の海岸地帯と、パキスタンがわのダシュト川流域のクッリー地域から、鋸歯文やジグザグ文、樹木文、羊歯文を施した土器や土偶や女神像が出土している。このクッリー文化の延長線上にあるナル文化で、人々は死に際してそれらを副葬品として葬るようになった（鈴木一郎『魔と呪術』平凡社、1978年、48頁）。鋸歯文やジグザグ文は、単なる装飾ではなかったと思う。日本の古墳壁画に見られる同心円と鋸歯文は、明らかに、この世とあの世の通過のさいに現れる文様である。古代西アジアでも、副葬品にこの種の文様を施したのであった。E. ヘルツフェルトは、『古代オリエントの中のイラン』（オックスフォード、1941年）の中で、彼自身が観察して描いた多くの出土遺物を扱っている。その中には、先史時代以来、連綿として用いられた連続三角文、鋸歯文、格子文の例が多く見られる。シュメール、ペルセポリス、テベ・ギーヤーン、スーサの例ばかりでなく、中国、ヨーロッパの関連する文様もあげられる（25, 28, 35, 42頁その他）。

連続三角文や鋸歯文は、三角形を平面的に広げる文様である。古代オリエントには、三角形を立体的に積み上げる方法も発達した。いずれの場合も、1つの三角形を繰り返して表現することにより、その力を増大しようとしたのである。それは、多くの宗教で、神名や神の属性を繰り返し唱えることによって、神の恩恵を引き出し、その庇護のもとに入ろうとする唱名と等しいものがある。ユダヤ人の間で護符とされるソロモンの封印、

ダビデの盾，ダビデの星がそれで，明暗2つの正三角形を組み合わせで六芒星をつくる。それは盾（マーズン）とも呼ばれるが，防御の意味をもっていた。ダビデの星は，歴代のユダヤの王の王章とされたが，ユダヤ人民は護符として身につけてきた。道切りを身に付けて，邪視除けにしてきたのである。19世紀にイランで生まれ，異端視されてきたバハイ教の標章は，九芒星である。この九芒星は，正三角形を3つ重ねることによってつくられる。バハイ教では，19とか9を聖数とするので，これに合わせて九角標章を創始したと考えられる。九芒星は，考古遺物には見られないので，新しい形である。イスラム教では，正方形を2つ重ね合わせて，八芒星をつくる。ことに，イランのモスクのタイルには多用されている。正方形は，古代遺物には見かける所であるので，イスラム教は，ユダヤ教の二重の三角形に手がかりをえて，自己の二重正方形をつくったと思われる。古代メソポタミアの八芒星は，神や王の標章であったが，正方形を重ねることによって，八つの方角を表す形を手に入れたのであろう。この八芒星は，さらに重ね合わせられて，十六芒星となる。

アガデのナラム・シン（紀元前23世紀前半）が山の前でルル人らの征服者として立つ，スーサ出土の石碑（J. プリチャード『写真による古代オリエント』プリンストン大学，1969年，309図）では，1つの完全な形を加えて，3つの標章が，王と山の上に見られる。この標章は，八芒星のそれぞれの光芒の間に，波形文（ゆるい鋸歯文か）を刻んだ短冊様のものがあり，合計16本の輻が放射されている。後になると，ロタスあるいは菊花として，16弁のものに発展してゆく。十二弁ロタスについても同じことがいえる。12弁の場合は，6弁のロタスを二重にしたのである。6弁のロタスは，二重三角形に由来するものであろうが，その経緯に不明な点がある。同じように，同心円（円形重複文）も，円文を立体的に重ねたものである。さらにそれが平面的に並べられ，連珠文として発達したのであろう。

昭和38年（1963）12月から始まった，平城宮跡の第14次調査のさい，1つの方形井戸の側板16枚が出土した。側板は各面2枚，上下2段になっていて，それらは全て木製の楯を転用したものであった。楯は頂部を山形に作った長方形で，長さ150センチ，幅54センチ，厚さ3センチあった。これは，『延喜式』『準人司』に記載されている，準人の楯と大きさと文様が一致した。その記述によれば，長さ5尺，広さ1尺8寸，厚さ1寸，頂部に馬の髪を8センチ間隔にあげた小孔に組み込んであった。さらに，赤白土墨を以て鉤形を描く，とあるが，これが逆S字形文様であることは明らかである。『延喜式』には，楯の上下に描かれた，黒と赤の鋸歯文について言及していないが，出土した楯には，それが認められる。出土した井戸は宮殿の井戸であるので，廃材を利用したとは，とても考えられない（中村明蔵『準人の楯』学生社，1978年，9-13頁）。

岡山市金蔵山^{かなくらやま}古墳出土の埴輪の盾の四周には連続三角文がついている。大阪府狐塚古墳出土の楯は、隼人の楯と同じくらいの大きさであるが、四周に連続三角文がついていた。大阪府和泉黄金塚出土の楯は、隼人の楯よりやや大きい^{あきせき}が、四周に連続三角文がついていた。福岡県の装飾古墳の一つである王塚古墳には、多色の連続三角文が施されている。薩南諸島のトカラ列島^{あくせき}悪石島の神社の鳥居の笠木に赤・黒の連続三角文が描かれている。これらの三角文は、外敵の侵入を防御する呪的な文様であった（中村，前掲書，208-223頁）。

茨城県虎塚古墳の墓壁の四周は、最上部と底部に連続三角文が描かれていて、その中間の壁面には、円文その他の文様が見られる。オーストラリア中部の原住民は、楯に稲妻を表す白いジグザグの線を描き、雨乞いをする（小学館『日本大百科全書』1，440頁，「雨乞い」）。オーストラリア人の楯には、鋸歯文が描かれていることは、よく知られていたようである。E. グローセ『芸術の始源』は、オーストラリア人の楯に描かれた鋸歯文あるいは菱形文は、動物の形に由来すると主張する（安藤弘訳，岩波文庫，1936年，180頁）。グローセが連続三角文の起源を動物と見たのは、示唆的である。古くさい学説として却けるわけにはゆかない。悪石島の鳥居の敷居にあたる部分には、平たい石が埋め込んであり、そこが、古くは祭壇の用をなしていたことを暗示する。オーストラリア人の雨乞いでも楯は祭壇であった。さらに、三角形は、動物であり、その心臓であり、古くは人間の心臓ではなかったかと思われるのである。葬家の門口に、左義長といって、3本の棒を先端の所で縛り、三角錐をつくって置き、喪中のしるしとする。あるいは、入口のまぐさに、正方形の紙を菱形のように貼り、その中に忌の字を入れてある。菱形は、古墳壁画の中にも、連続三角形と共に見られるが、これは、三角形の底辺を合わせて、平面的に並べたものであろう。立体的に三角形を積んで六角形をつくるのは先述した。

連続三角形や鋸歯文の意味として、楯の三角文は、革楯に施した刺し縫いの文様をかたちどったもので、その製作工程から必然的に生じたものだとする小林行雄説や、上下方向に一列に並べられる連続三角文は、石棺の入口や奥室通路の縁などにめだって使用されるので、入口を意識しているという小田富士雄説がある（中村，前掲書，210-212頁）。前者は、この文様を楯にだけ限定したための結論で、比較論の立場からは納得しがたいものがある。隼人の楯の上部、黒と赤の連続三角文の上に馬髪が垂れ下がっていた。この場合、連続三角形は猿を意味していたらしい。あるいは、三角形は、豊穡の源泉としての猿の心臓または肝を表したとも考えられる。厩舎に猿をつなぐ風習の起源は、古く隼人の楯の文様に見られそうである。隼人の楯は、単なる武具ではなく、タビデの盾やボディ族の皮の盾と同じような、あるいは蔵面に描かれた山形文のような、部族神

のエネルギーの象徴でもあった。境界の人である隼人は、この楯によって防御されたのであった。頭部が三角になっている幡は、この種の楯と同類の構造をもっている。古代ギリシアでは、入口に豊穰・再生の女神ヴィーナスの象徴である円錐形大理石を置いた。東洋では幡や喪家の三角錐として表された。